

日本初ユニバーサルシアター シネマ・チュプキ・タバタ 誕生!

東京都北区田端 明治大正の頃から芸術家や

文学者が集まり、芸術村・文士村を形成したという文化あふれる街だったようです。この街で、今年9月1日、日本の映画史上たいへん重要な出来事が！日本初のユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」がオープンしたのです。

直前の8月27日には、王子の北とびあでブレ・オープニングイベントとして、支援者に感謝するユニバーサル上映会を開催。わたしの後部座席には盲導犬を連れた観客も！こんな上



映会は初めてです。会場には音声ガイドの他、字幕用スクリーンと手話通訳も。上映作品は「みさまのゆくせく」の萩久保監督はいろんな観客の姿に感動してステージで涙を見せ、わたしたちも思わずもらい泣き。続いて、ガーナのストリートチルドレ

ン自立支援団体

「Enjo」代表 矢

野・デイビッドさんのダイバーシティ・トークショーでは、ガーナで起きた暴動事件の影響で6歳から日本に移住した矢野さんの波乱の半生が語られ、さらに落涙。矢野さんはモデルやライブ活動、マイノリティーや人種差別に関する講演などなど、様々な活動をされています。ちなみに2013年のドキュメンタリー映画『ハーフ』にも出演されています。

チュプキの母体となったのは、バリアフリー映画鑑賞推進ボランティア団体「City Lights シティライツ」。チャップリンの名画『街の灯』から名付けられたこちらの団体は、視覚障がい者が映画を楽しむための音声ガイドをいち早く手がけ、バリアフリー上映活動をしてきました。



活動から十五年目の今年春に立ち上げた念願のバリアフリー映画館が、このたび、すべての人に開か



れた、夢の「ユニバーサルシアター」として、田端の地にオープンしました。ユニバーサルシアターとは、障がいと呼ばれる不自由さを抱えている人も、ふつうの人も、どんな人でも、分け隔てなく受け

入れようとする映画館。目の不自由な人のために音声ガイド、耳が不自由な人のために字幕付き上映、車椅子スペース、親子鑑賞のための防音ブースなどを配備し、みんなが一緒に映画を楽しめるように設計されています。映画を観るということの意味が、だんだんと変化してきているのかもしれない。映画というものはもちろん、映像だけで出来ているものではありません。つくった人たちがいて、つくった人たちがいて、上映したい人たちがいて上映する人たちがいて、上映する場所があつて、鑑賞する人たちがいて、語られる言葉があつて：そしてそういう一回一回が積み重なった二連の出来事を通して、わたしたちの思うこと、感じること、生きて暮らして、実際の生活が現実が変わっていくよう



な、そういうものだと思います。映画を楽しむ場所が、どんな人も排除しないで受け入れようとするユニバーサルデザインでつくられるということ、この時代に大切な意味を持つと思います。実際にこの映画館を設立するためにクラウドファンディングで寄付を募ったところ、三か月ですべての設立経費が賄える額が集まってしまったそうです。これは多くの人がこの映画館の重要性をわかっているのだと思います。チュプキは夢の映画館であり、「心から応援したくなる」映画館なのです。エントランスを入って左側の壁には、支援者の名前が葉っぱに書かれた「チュプキの樹」が大きく描かれています。

今年の夏まで、「未来の映画館をつくる」というワークショップに参加していて、たまたま代表の平塚さんや支配人の佐藤さんから設立の経緯を伺う機会があったのですが、ワークショップ主催者があされるほどの、計画性より「思い」先行、見切り発車的に進められてきたというチュプキ立ち上げ。「もうダメかと追い込まれると、不思議と助けが現れるんです」というようなことを二人はおっしゃっていました。その時点でもまだまだ資金は足



りず未確定要素が
いっぱい
あって、
その後も
いろんな

剰余曲折があったようですが、ついに予定通り九月一日のオープンを実現させてしまいました。思いだけじゃ何もできない、と言う人もいるけれど、やっぱり思い先行で正解。あれこれ考え過ぎて心配していると、それこそ何もできなくなってしまうのかもしれない。やれるだけのことを精一杯、一生懸命やってみる人は、後は運を天にまかせような、樂觀的なところがあります。「思いは必ず実現する」「現実には、必ず思いから始まる」そんな言葉が浮かんできました。そして映画というのは、人間が何かを思い、その思いをみんなと共有するためのツールかもしれません。

オープニングの九月には『モダンタイムス』『独裁者』などのチャップリン特集と、『かみさまとのやくそく』『胎内記憶を語る子供たち』『他を上映。十月は労働者の街・釜が崎』『子どもの里』の密着ドキュメンタリー『さとにきたらええやん』と不登校ゼロを目指す大阪の公立小学校の取り組みを取材した『みんなの学校』というラインナップ。この二作品はどちらも、「普通じゃない」というレッテルを貼られて排除されてしまいがちな、障害やい



ろんな事情を抱えた子どもたちを受け入れ、居場所をつくるという共通のテーマを持っています。わたしたちは先日やっと『みんなの学校』を観に行くことができました。教育というものの持つポテンシャル、人間の可能性を感じさせてくれるような映画でした。上映作品の選定のしかたを平塚さんに訊ねてみたところ、「自分たちが実際に観て、みんなに観せたいと思うもの」という基準で選ぶそうです。十一月のラインナップを見ても、感動したもので「これは観たい！」と思うものばかり。きっと、「チュプキが選んだものなら良い映画に違いない」ということが、定着していくことでしょう。映画をつくる側にとっても、「チュプキに選ばれるのは名誉なこと」ということになるかもしれません。もう、われわれには想像もつかないようなたいへんなことが、たくさんたくさんあるんだと思いますが、これからも力強く続けて行っていただきたいです。「思い」は目に見えず、伝わりにくいこともあるかもしれませんが、その思いだけが人を動かす、そういう時代になったのかも。「チュプキ」はアイヌ語で、月や木洩れ日などの「自然の光」を意味し、シアターは森の中をイメージしているとのこと。人工物だらけの都会の中だけで、このリラククスできる空間で、良い映画を胸一杯に深呼吸してみましよう☆

取材・協力 山村千絵 せご三平
公式サイト <http://chupki.jp.org/>

CINEMA JOURNAL

vol.98

2016
秋冬

シネマ・ジャーナル



◆特集 映画祭◆

SKIP シティ国際Dシネマ映画祭
レインボーリール・東京
あいち国際女性映画祭
アジアフォーカス・福岡国際映画祭
したまちコメディ映画祭 in 台東
レイバー映画祭
吉岡宿にしぴりかの映画祭
東京国際映画祭
中国映画週間、ドイツ映画祭

◆インタビュー・会見◆

『ダゲレオタイプの女』タハール・ラヒム
『校庭に東風吹いて』沢口靖子さん
『Start Line』今村彩子監督
『ハイヒール革命』古波津陽監督
『小さな園の大きな奇跡』關信輝監督
&脚本の張佩瓊ティーチイン



★UCLA映画テレビアーカイブ 復元映画
コレクションに通って

★世界初ユニバーサルデザイン映画館

「CINEMA Chupki TABATA」

・行ってきました! 「ジブリの大博覧会」

●女たちの映画評・新作紹介

『後妻業の女』を見て 女3人トーク
『92歳のパリジェンヌ』

ルギーノ・ヴィスコンティ 3作品

『私の少女時代』『僕と世界の数式』
『人魚姫』『ドラゴン×マッハ!』

